

#### (4) 「ポンテオピラトの下に苦しみを受け」

村上 伸

##### ルカによる福音書 2 章 22 節-35 節

使徒信条は「聖霊によりて宿り処女マリヤより生まれ」と告白したすぐ後で、「ポンテオピラトの下に苦しみを受け」と、いきなりイエスの苦しみについて語っています。しかし四つの福音書が書いている通り、この間にはイエスの地上でのさまざまな行為や出来事がたくさんあるわけです。例えば、イエスは辺境の地ガリラヤで、その宣教活動を始められました。人生の苦しみをなめている沢山の貧しい人々を愛され、彼らと共に生きられました。人々の不安を除き、彼らに希望を与え、病人を癒した。言葉と行いを通して神の国の近いこと、すなわち福音をのべられました。

福音書にはこれらのことがずっと書かれているのですが、使徒信条はそれらをすべて飛び越すかたちで、いきなり「ポンテオピラトの下に苦しみを受け」というところに行っています。多くの学者がこのことに注目して、いったいこれには何の意味があるのかと問います。ある人は、これは多分パウロが考えていたことに似ているのではないかと、と言います。パウロはイエスの地上の生涯についてはあまり語っていません。コリント人への第一の手紙の初めの方に「わたしは十字架につけられたキリスト以外には何も知るまい」と書いていますが、彼がキリストを見る場合は、十字架につけられたキリストに集中していました。コリント人への第二の手紙にも「肉にしたがってキリストを知ることはいらない」と言っています。「肉にしたがって」とは人間的見方でということでしょう。使徒信条の書き方はこれも似ています。

誤解してならないことは、パウロは決してイエスの地上の具体的生活を無意味だと考えたわけではないし、使徒信条がいきなり「ポンテオピラトの下に苦しみを受け」という告白に飛んでいるのも、途中で起ったさまざまなイエスの生涯の出来事を無意味だと考えたのではないということです。むしろ逆に、非常に大切なもの、省略できないものと考えていたのです。ただ、それらすべての意味はいったい何だったのかと問うたとき、すべては「苦しみ」という一点に凝縮しているのだと見たのだと思います。イエスの生涯を最も簡潔に表していると言ってよいマルコによる福音書の 10 章は、その 42 節以下に「イエスは一同を呼び寄せて言われた。『あなた方も知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人達が権力を振るっている。しかし、あなたの方の間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕えるものになり、一番上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。人の子は仕えられるためではなく、仕えるために、また、多くの人々の身代金として自分の命を献げるために来たのである。』」と書いています。マルコはその福音書の中で、イエスの地上での生活のさまざまな姿を展開しているのですが、その全生涯の意味はここにあるのだ、という書き方です。苦しみ、人のために命を献げることこそ、イエスの生涯の目標であり、意味でありました。使徒信条が「マリヤより生れ」から「苦しみを受け」へと、いきなりつながっているのも、途中で起った多くの出来事を無視したり、無意味だとしているのではなく、そのすべての意味は「苦しみ」という一点に凝縮していると言っているのでしょう。

クリスマスの物語を読むときにいつも感じることは、あの物語のどこかにかならずイエ

スの苦しみや十字架を暗示する言葉が入っていることです。先週クリスマス礼拝で読んだマタイによる福音書を、改めて考えてみたいと思います。2章1節以下に、東の方から占星術の学者たちがやって来てイエスを拝んだとあります。美しい星が輝き、その星に導かれて彼らはイエスの許にきて、黄金、乳香、没薬を捧げた、この光景は昔から芸術家の想像力を刺激したと見えまして、多くの有名な画家がこの場面を画いています。レンブラントの素敵な絵もその一つです。面白いことに、三人の博士の一人が大きな傘をさして後の方に立っている。オランダは日本と交易していましたから、多分これは日本から伝来したのでしょう。このようにイエスの誕生物語はロマンチックに描かれることが多いのです。

しかし、決してそんなものではありません。占星術の学者たちがやって来たとき、ヘロデは不安を感じたと書いてあります。「ユダヤ人の王として生まれた方はどこにおられるか」と学者たちが尋ね回っていることを聞いて、ヘロデは自分の支配が脅かされるのではないかと恐れしました。権力者というものは絶えず不安なのです。権力を持つと不安になる。ヘロデは不安のあまり自分の地位を脅かすかもしれない人物を見つけて殺したいと思いました。このようにイエスは生れたときから権力者の殺意にさらされていたのです。

酸鼻極まりない話その後につづきます。ヘロデはついにベツレヘム近郊にいる2才以下の男の子をことごとく殺させるのです。また11節に「彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた」と書いてあります。三種の極めて高価なプレゼントですが、三番目の没薬に注目したいと思います。没薬とはアラビア原産の橄欖科の植物の樹脂から作る貴重な薬剤で、防腐剤としてミイラを作るときに遺体に塗ったと言われていました。

イエスの死後、その亡骸が墓の中に横たえられましたが、日曜日の朝早く女の弟子たちがイエスに油を塗りに墓に行く。そのために彼女たちは香料を買ったとマルコによる福音書にあります。これが没薬だったのではないかと。すなわちプレゼントの没薬は死への暗示と言えましょう。イエスは生まれながら権力者の殺意にさらされ、その周りで多くの殺戮が行われ、そのために彼はエジプトへの難民となった。イエスは生まれながら難民であったのです。

だからイエスの誕生物語はただのおめでたい話ではありません。生れたときから彼は死の影に囲まれていました。今日のテキストであるルカによる福音書の2章22節以下は、年老いたシメオンがイエスを抱いて神をたたえたという、いわゆる「シメオンの賛歌」です。「わたしはこの目であなたの救いを見た」。もちろんここには深い喜びがあります。しかし、喜びだけではない。シメオンは続けて、赤子を抱いているマリヤに向かって「この子は、多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。あなた自身も剣で心を刺し貫かれます」と言います。

スタバト・マーテル(悲しみの御母はたたずむ)という曲があります。イエスを生んだけれど、あのようなかたちで先立たれてしまった母マリヤの悲しみを歌った心にしみる曲ですが、悲しみの母はすでにこの誕生物語から始まっているのです。シメオンはそれを予言しました。つまりルカは、イエスは苦しむためにこの世に生まれたと考えたのでしょう。誕生物語はただのおめでたい話ではなく、死の影に覆われていることを私たちは知らなく

てはなりません。

しばらく前に遠藤周作が亡くなりました。彼の『沈黙』という小説を読み直してみたのですが、あの中にフェレイラという大先輩の宣教師が出てきます。この人は途中で転んだのです。つまりイエスの信仰を捨てた。名声の高いこの宣教師が転んだことで、本国には大変なショックが伝わりました。何人かの若い司祭たちが、そんなことは信じられない、日本に行ってフェレイラ先生に直接会って確かめようとやって来て、彼らも捕らえられます。そのような状態でフェレイラに会う。フェレイラはその若い司祭に向って、自分が転んだのは、一人で頑張っていると日本の沢山のキリシタンがひどい目に会うと判っていたからだと言います。「『お前は彼等より自分が大事なのだろう。少なくとも自分の救いが大切なのだろう。お前が転ぶと言えはあの人たちは穴から引き揚げられる。苦しみから救われる。それなのにあなたは転ぼうとはせぬ。お前は彼等のために教会を裏切ることが怖いからだ。このわしのように教会の汚点となるのが恐ろしいからだ』」そこで怒ったように一気に言ったフェレイラの声が次第に弱くなって、『わしだってそうだった。あの真っ暗な冷たい夜、わしだって今のお前と同じだった。だが、それが愛の行為か。司祭は基督にならって生きよと言う。もし基督がここにいられたら』フェレイラは一瞬、沈黙を守ったが、すぐ、はっきりと力強く言った。『たしかにキリストは彼らのために転んだだろう』」

この小説のポイントです。結局この司祭も転びます。そして踏み絵を踏む。その場面、そばから日本人の通訳が「そんなに気にすることはない。これは形だけのことだ」と促すのがいかにも日本的です。続いて遠藤さんは次のように書いています。「司祭は足を上げた。足に鈍い重い痛みを感じた。それは形だけのことではなかった。自分は今、自分の生涯の中で最も美しいと思ってきたもの、最も清らかと信じたもの、最も人間の理想と夢にみたされたものを踏む。この足の痛み。その時、踏むがいいと銅板のあの人には司祭にむかって言った。踏むがいい。お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている。踏むがいい。私はお前たちから踏まれるため、この世に生れ、お前たちの痛さを分つため十字架を背負ったのだ。こうして司祭が踏絵に足をかけた時、朝がきた。鶏が遠くで鳴いた」

「沈黙」という小説はこの一点で、キリストへの深い見方を示していると思います。イエスは苦しむためにこの世に来られたのです。だから使徒信条が「処女マリヤより生れ」というところからいきなり「苦しみを受け」と言っていることには、深い意味があると言わざるを得ません。

次にもう一つ注意を促しておきたいことがあります。それは「ポンテオピラトの下に」という一つの言葉です。ポンテオピラトは紀元 26 年から 36 年まで、10 年間ローマから派遣された総督としてユダヤ地方を統括しました。その任期中にイエスが十字架につけられた。そのことによってポンテオピラトという名は使徒信条に記されて、キリスト教会の歴史が続くかぎり人々の記憶に残されることになりました。割に合わない話です。彼はネロのような特に悪い支配者ではありませんでした。ある学者は、ピラトは要するに中間管理職だったのだと言っています。彼の持っている権威は借り物で、ローマからたえず指令がやってくる。上からは、常に押さえられるし、マタイによる福音書によれば、家庭に帰ると妻からいろいろ言われる。そのうえ被支配者であるユダヤ人たちからもいろいろ突き上げられるというわけです。このように各方面からの力の作用を受けて、その力関係の中で消耗していた。

このピラトは本当はイエスを助けたかったのです。そしていろいろとやってみたがユダヤ人がうんと言わない。そこで「このことについてはお前たちの責任だ。自分には何の責任もない」と言って手を洗ってしまったとマタイによる福音書は書いています。前述のようにピラトは中間管理職としてさまざまな力関係の中で、自分のやりたいことも出来ないあわれな中年男だったとか、それがあたかも張本人のように使徒信条に名前がのってしまったのは可哀相な話だとかいう見方は、はなはだ面白いのですが、使徒信条がわざわざポンテオピラトの名前を上げているのには、もっと深い意味があるのでしょうか。

それは、具体的な一人の人物、統治の期間もはっきりと判っている歴史上の人物がユダヤを支配している時に、すなわち具体的な歴史の中の一つの時に、イエスは一人の人間として生まれてきて苦しめられたということです。「ポンテオピラトの下に苦しみを受け」というのは、そのことを言うための言葉です。

福音、すなわちキリスト教のメッセージは、抽象的なものではありません。いつの時代にも変わりなく適用される「無時間的真理」ではない。具体的な歴史の中で、つまり「今、ここで」宣べ伝えられ、信じられるべきものです。今度のペルー人質事件でカトリックの神父が、公邸内に入って行ったことは、この意味で象徴的です。キリスト教は具体的な場所にいなくてはならない。そこから離れて何か抽象的な真理の中に安住してはならない。キリスト教の考えから言っても、あの神父が公邸内に入って行ったのは当然です。具体的な場にキリスト者はいなければなりません。「ポンテオピラトの下に」というのはそのことを意味しています。

もう一つ言うならば、ポンテオピラトの名に代表されるのは良かれ悪しかれ国家の権力であるということです。たとえ中間管理者的であろうと国家の権力を代表していることは否定できません。「ポンテオピラトの下に」とは国家の権力がキリストとぶつかったということです。ルカによる福音書の中にはイエスが生まれた頃、皇帝アウグストの人口登録令が出て、ヨセフとマリヤは自分の本籍に戻った、とあります。マタイによる福音書では、ヘロデ王の時にイエスは生まれました。ヘロデは2才以下の男の子をことごとく殺すという邪悪な意思を実行に移しましたが、イエスはそれに巻き込まれそうになりながら生まれてきました。

国家というものはこのようにキリストの道を妨げたり、ねじまげようとする。「ポンテオピラトの下に苦しみを受け」というのは、そのことを意味しています。だからといって、国家のやることに何でもかでも反対すればよいというものではありません。国家が人々の間に公正と正義を行う正しい国家になるように祈り、場合によっては協力もする。そのために教会は絶えず発言していかなければなりません。国家というものは下手をすると正義と公正を踏みにじる方向にすぐ行ってしまふ。今の日本の状況はそれを表しています。そういう形で国家の力がキリストにぶつかって来る。「ポンテオピラトの下に苦しみを受け」というのは、そういう問題が世界にはあるということを示しているのでしょうか。

しかしそれで何もかも駄目になるというわけではないのです。使徒信条は、キリストの道が復活の光に向っていくということが続いて告白しているのですから。

(日本基督教団みくに伝道所 1996年12月29日 礼拝説教)